

『絵空ノート』

作 千頭和直輝 ソラニエ

舞台

新聞紙、和紙、コピー用紙など、様々な紙束が舞台の至るところに堆積している。紙束は原稿、資料、書籍、手紙など、様々な情報の器になる。

屏風状の壁が3つあり、展開に合わせて空間を作る。

衣装

時代の変遷に合わせて和服から洋服へと変化していく。まったく違うものとして現れるのではなく、それぞれの要素が足されたり混ぜ合わさったように見えるとよい。

役名が存在する役以外は黒い羽織、マント、コートを羽織っている。それらを羽織る人物は、死者であり、作家が切り捨てた人物であり、日本に堆積している思いや、記憶や、願い等の断片である。作家が役として切り抜くことによって、断片たちは役という形を与えられ、羽織を脱ぎ捨てる。

登場人物

アキオ

歴史小説家。地方紙の小説欄で歴史小説を書いている。資料に基づき、なるべく事実をありのままに描こうとする。事実とは何か、現実とは何かと思い悩む。躁鬱気味。

チエコ

アキオの妻、専属編集担当。アキオの編集者として自宅に通ううちに親しくなり、結婚。結婚後は勤めていた出版社の契約社員としてアキオ専属の編集担当になる。正社員時代はフクエの編集も勤める。事実を、現実をというアキオが、歴史小説という架空の世界に閉じこもっていることに不満を覚える。

ハルカ

アキオ、チエコの娘。父、母と接する時間が少なく、本、テレビ、パソコンに囲まれて育つ。情報の竜巻にさらわれて、オズの魔法の国へと旅立つ。アキオの描く歴史小説の人物を使い、オズの魔法使いを原作とした童話を書き上げていく。現実を描こうとする父と対立する。

フクエ

歴史小説家。雑誌で歴史小説を書いている。資料をあくまで材料としてしか用いず、物語を面白くする為に事実とは異なることも書くため、アキオと対立する。ひょうひょうとしていて、その場で面白いと感じたことをそのまま書き取って行く。

村田蔵六

のち大村益次郎。蘭医の経験から西洋兵学・蘭学を教え、日本陸軍の基礎を作る。大変な変わり者で、人の恨みを買うことが多い。自分の中には真つすぐな芯が通っている。

失本（しいもと）イネ

ドイツ人、フォン・シーボルトの娘。幼い頃からオランダ語に興味を持ち、医者を目指す。産科医の修行中に師匠である石井宗謙に手込めにされ、娘を出産する。蔵六にオランダ語を師事する。

楠本滝

イネの母。家庭の貧しさから幼い頃にオランダ行き遊女になる。シーボルトと結ばれイネを出産するが、直後にシーボルトと離ればなれになってしまう。イネが学問をすることに猛反対し、普通の女として幸せになつてほしいと願う。

二宮敬作

シーボルトに師事した蘭医。イネの指導を引き受ける。蔵六ともつながりがあり、イネと蔵六を引き合わせる。まじめでやさしく、情にもろい、イネにとっての父親的存在。

桂小五郎

長州藩の維新志士達の兄貴分。慎重に行動し、逃げの小五郎と揶揄される。蔵六の才能を見だし、軍事に抜擢する。明治維新という絵空事をなんとか具現化したいと努力するが、維新志士達の身勝手な行動に絶望する。

山縣有朋

奇兵隊軍監、陸軍卿、内閣総理大臣と軍閥を駆け上がる。幕末から日露戦争まで常に姿を現す。村田蔵六が亡くなった後を引き継ぎ、日本陸軍を作り上げる。軍国主義を作り上げる。

乃木希典

陸軍大将。日露戦争時に旅順要塞で指揮を取り、多大な犠牲者を出したことを悔やむ。明治天皇を崇拜し、崩御の後殉死する。決意、覚悟などの精神的、形而上的要素を軍事に持ち込む。

児玉源太郎

陸軍大将。日露戦争で乃木に変わり指揮を取り、旅順要塞を陥落させる。現実家。おおらかで声が大きい。細かいことは気にしない。

小村寿太郎

日露戦争の終戦協定をポーツマスで結ぶ。日本は強い国、いくらでも戦争ができるという空想と、物資の不足から戦争継続は絶対に不可能という現実には板挟みにされる。

与謝野晶子

歌人、詩人。当時の女性達の抑圧された感情を伸びやかに歌い上げる。商家に生まれ、家の手伝いに忙殺されて育つ。家の抑圧から解放されるため、与謝野鉄幹を頼って家出する。青鞮社の立ち上げに協力する。

平塚らいてう

女性の独立を目指した雑誌「青鞮」の創設者の一人。理想の女性の在り方を模索するが、結婚し、母となり、現実との折り合いをつけることに苦しむ。

伊藤野枝

青鞮社員。貧しい家庭に育ち、自分が今いる場所から抜け出したいという気持ちが強い。家を飛び出し、正当社員となる。らいてうから青鞮を継ぐ。

尾竹紅吉

青鞮社員。爆竹のようなエネルギー。好奇心から世間の反感を買うような行動をしたため、自身の意図とは反して、青鞮に対するふしだらなイメージを作ってしまう。

比嘉正次郎（しょうじろう）

中学生で構成された兵隊、鉄血勤皇隊の一人として沖縄で戦った地元の少年。日本は神の国であるという幻想に取り付かれ、お国の為に戦う。散り散りになった同級生を探し求めて彷徨する。

脳無しのカカシ

ブリキのきこり

臆病なライオン

劇作家（演出家）

シーボルト	晶子の母	ロシア補佐官
緒方洪庵	女中	日本補佐官
蔵六の父	デュフエ	青鞥社員1
石井宗謙	高級官僚	青鞥社員2
夫	らいてうの父	青鞥読者男1
妻	与謝野鉄幹	青鞥読者男2
しお	ニコライ	青鞥読者女1
閣僚1	ウイッテ	青鞥読者女2
閣僚2	官僚1	通りすがりの男
閣僚3	官僚2	通りすがりの女
商人	野枝の叔父	マンチキン人1
坂本龍馬	野枝の叔母	マンチキン人2
伝令	子供1	マンチキン人3
大島の指揮官	子供2	情報通
老人閣僚	参謀	奥村博
兵士1	現代の女1	辻潤
兵士2	現代の女2	野枝の姑
兵士3	現代の老人	沖縄の陸軍中尉
司令官	国民1	下級中学生
暗殺者	国民2	沖縄の指揮官
福沢諭吉	国民3	

一、歴史小説を書くということ

暗転中。暗闇の中で、紙を鋏で切り進める音が聞こえる。遠くでドアを叩く音。

チエコ 先生。先生？

ゆつくりと舞台の隅が明るくなる。アキオの部屋。紙束が無造作に平積みされ、散乱している。

チエコ アキオさん？入りますよー？

鍵を開け、ドアが開き、閉まる音。

チエコ 先生？（アキオを発見し）あ、やっぱりいた。

アキオは応えない。作業に没頭している様子。

チエコ 先生、執筆に集中されるのは大変結構ですが、お返事くらいしてください。アキオさん聞いてます？

アキオ （振り向かず）ごめん、あと少し。あと少しだから。

アキオの操る鋏が空を切る。ちよきん。

アキオ ほら、動き出した。

切り取った紙束を広げると、一連の紙細工になっている。紙細工は空間に広がって行き、やがて紙吹雪となって舞台上に堆積し始める。弾けるようなゆつくりとした音楽。

舞台が展開していく。屏風が動き、空間が形作られる。物語が展開していく。役者が現れ、ゆつたりとした動きの中でそれぞれコンタクトを取りつつ、出会い、別れて行く。

二、イネの生い立ち

音楽が高まる。

アキオの語りに合わせて、シーボルト、敬作、滝、イネが演技を行う。

アキオ 時は江戸末期、長崎の出島に降り立った一人の青年。彼の名はフオン・フランツ・シーボルト。

シーボルト デス。

アキオ 日本が唯一扉を開いていたオランダ使節団の一人としてこの日本という国へやってまいりました。

敬作 蘭医の二宮敬作です。

シーボルト ヨロシク。(敬作と握手する)

アキオ 医者として働くかたわら、彼は出島に出入りする美しい芸者、お滝に一目惚れ。(後ろ姿で母登場)

シーボルト オウ。

アキオ 熱烈な求婚の末に、二人の間には女の子が生まれました。

イネを抱いた滝が子守唄を歌う。

アキオ イネと名付けられたその娘。ほどなくして悲しい別れがやってきます。悪事が幕府にばれて、シーボルトは国へ帰ることになってしまいました。

滝 旦那様、こちらをお持ちください。(白い包みを二つ渡す)

シーボルト ……?

滝 私と、この子の髪を包みました。

シーボルト ?

滝 (ジェスチャーを交えながら) 髪、これ、はいる。

シーボルト ?

滝 ああもう!

シーボルト (髪を指しながら) haar (ハール)?

滝 そう! そうです。私たち母娘の代わりだと思ってお持ちください。

幕府の役人がシーボルトを連れて行くこうとする。

シーボルト オタクサ（お滝さん）、アリガトウ。キット、ワスレナイ！
敬作 せんせーい！

シーボルト ケイサキー！（連れて行かれる）

アキオ 残された滝は、強く、たくましく生きて行こうと決心し、イネを
厳しく育てます。そんなある日、

音楽が止む。

イネ （つぶやくように）学問がしたい。

滝 何をばかなことを言ってるんだい。お前は女だ。女には学問なんてなん
の足しにもならないんだよ。

イネ （母に）オランダ語をもっと勉強したいの。

滝 私はね、イネ。あなたに幸せになってもraitainだよ。特別なことは
何もいらainだ。

イネ ……。

滝 イネ？

敬作 お滝さん、どうでしょう。私に、おイネさんを引き取らせていただけ
ませんか。先生からくれぐれもあなた方母娘をよろしく頼むと言われ
ています。

イネ お願いします！（敬作に頭を下げる）

滝 イネ！

イネ どうか私を、二宮先生のうちへ置いてください。

敬作 お滝さん、任せていただけませんか。

滝 ……イネ、お前がどうしても行きたいというなら、自分はまだ女では
ないと思いなさい。男の世界に入って行くのなら、それだけの覚悟を持
つてことにあたりなさい。

イネ ……はい。

敬作 おイネさん、さあ。（イネを促して去る）

滝 （去って行く二人を見て、すぎるような気持ちで）よろしく、お願いし
ます。

遠くでドアを叩く音。

チエコ 先生。先生？

舞台の隅が明るくなる。フクエの部屋。紙束が綺麗に整頓されて積み上げられている。フクエはアキオの小説が掲載されている地方新聞を読んでいる。

チエコ フクエ先生？入りますよー？

鍵を開け、ドアが開き、閉まる音。

チエコ 先生？（フクエを発見し）あ、やっぱりいた。

フクエ やあやあ。そろそろ来る頃だと思ってたよ。

チエコ そう思ってたなら返事くらいしてくださいよ。

フクエ ごめんごめん。アキオ君、順調みたいだね。

チエコ ぜんっぜん。もう編集の身にもなってほしいもんですよ。こないだも原稿取りに行ったら全然返事してくれなくて。あ、それはフクエ先生も同じか。

フクエ ごめんて。

チエコ しかも今思いついたって言って8時間ぶっ通しで付き合わされましたよ。

フクエ 相変わらずだねあいつは。君も一人の身体じゃないんだから、気を付けないと。

チエコ そうですよ、あの人ったら全然気使ってくれないんです。

フクエ そうじゃなくて。まあいいや。はい。（原稿を渡す）

チエコ ありがとうございます。

フクエ 今回は調子良かったから、2週分まとめて渡しとくよ。気に入らなかつたらまた来てくれれば直しとくから。

チエコ アキオさんも少しはフクエ先生を見習ってくればいいんですけどね。

フクエ 人それぞれやり方があるから。ま、とりあえず読んでみてよ。
チエコ はい。

チエコは原稿（紙束）を受け取り読み始める。

四、村田蔵六

蔵六が出て来て舞台を歩き回る。

フクエ 歩く。歩く。歩く。文政8年、周防国（すおうのくに）、鑄銭司

（すぜんじ）村に生まれた村田蔵六はよく歩いた。彼の目指した地はどこだったのか。果たしてその地にたどり着けたのだろうか。それを追ってみることにしたい。

蔵六に向かってフクエが話かける。

フクエ いやあ、今日はまた暑いですね。

蔵六 夏は暑いものです。（すれ違って去る）

フクエ とまあこんな具合。自然一人でいることが多いが、まったく気に留めていない様子である。

舞台は適塾。学生達が熱っぽい口調で議論を交わしている。蔵六はその片隅に座り、静かに本を読む。塾の指導者である緒方洪庵がやってきて話しかける。

緒方 村田君。どうだい、ひとつ長崎に行ってみないか。

蔵六 長崎、ですか。

緒方 君はうちの塾へ入ってから、蘭学も、医学も、基礎は十分に身につけられたと思っている。やはり蘭学の本場と言えば長崎だ。私も若い頃は

蔵六 そうですか。では参ります。（立ち上がり歩き出す）

緒方 （ややあっけにとられながらも喜び）そ、そうか。気をつけるんだぞ。

蔵六は去ろうとするがすぐ戻ってくる。

蔵六 ただいま帰りました。

緒方 早いな！

蔵六 長崎とは妙なところでした。

緒方 そ、そうか。

蔵六は一礼して去ろうとする。

緒方 え、終わり？ちよ、ちよっと。（蔵六を捕まえて塾頭になってほしい

旨を耳打ちする）

蔵六 わかりました。

蔵六はにわかには塾生の前に立つ。

蔵六 今日から塾頭になったのでよろしく。

塾生 ええー！

蔵六 今日は奉行所から遺体を回してもらえということなので、解剖をやる。

蔵六はさっさと歩いて去る。塾生達は慌ててついていく。

父 蔵六。

蔵六 はい、父上。

父 どうだ、そろそろ戻って来て家業を継いではもらえないか。

蔵六 わかりました。（塾生に向かつて）というわけなので失礼します。

塾生 いやいや、お前それはないだろう、無責任だ（など愚痴る）

蔵六は父と共に、塾生達とは反対方向に去る。

五、同時代の歴史小説

フクエ どう？

チエコ 悪くないと思います。でも、さすがに展開早すぎませんか？歴史小説なんだし、もつとじっくり書き込んで行っても読者はついてくる

と思いますけど。

フクエ やっぱりそう思っちゃうかー。やー、それは考えたんだけどね。ま
ま、今回はこんな感じのテイストってことで。

チエコ わかりました。いくつか文字数調整しないといけないところは出て
きそうですけど、基本的にはこの方向で。

フクエ どうも。

チエコ でも、やっぱいいんですかね？

フクエ なに？アキオ君のこと？

チエコ え、ええ。同じ時期に、同じ時代を扱った小説を書く、なんて。

フクエ (笑いながら) 面白いと思うんだけどなあ。

チエコ でも、ずっとタブーだったじゃないですか。そういうの。

フクエ おもしろいなら、それでいいじゃない。僕もアキオ君も知らない仲
じゃないんだし。

チエコ そう、ですかね。

六、産科医

イネが一人で思い詰めた顔をしている。敬作に言われたことを思い出して
いる。

敬作 おイネさん、あなたが学問をしたいという決意はよくわかった。しか
し、決意というものはあなたの中にあるもの。現実に形を結ばなけれ
ばそんなものはただの絵空事だ。あなたの決意をどんな形であなたの
外に形作りたいのか、学問によって何をなしたいのか、それをよく考
えることです。

敬作が現れ、イネに話しかける。

敬作 どうだい。考えはまとまったかい？

イネ (しばし沈黙。身を切るような声で) 今の私には、わかりません。二
宮先生。どうか、どうか私にお教えてください。これから何をすれば良
いのか。

敬作 私はね、あなたに産科の医者になってもらいたいんだ。

イネ …産婆のことでしょうか？

敬作 産婆はあくまで出産の手助けをするものだ。難産の場合は産婆の手に負えなくなり、我々医者が呼ばれることになる。しかし・・・誠に残念な話だが、我々男の医者には、（恥ずかしがりつつ）その、なんだ、大事な、部分を、診られるのが恥ずかしいと言って、手遅れになってしまうことがある。

イネ （激しく同意して）気持ちにはよくわかります。

敬作 だがしかし、あなたは女だ。女の医者であれば、患者もためらうことはないだろう。あなたが医者になることで、救える命がある。

間。

イネ やらせてください。私に産科医になる学問を授けてください。

敬作 （頷き）よく決心した。その覚悟を、生涯忘れないように。

イネ はい。

敬作 今日はゆっくり寝なさい。明日の朝から始めよう。

七、アキオとチエコ

アキオの部屋。チエコが原稿を受け取りに来ている。アキオは執筆中。チエコが原稿（紙束）を読み終わり、

チエコ お疲れさまでした。

アキオ （手を動かしながら）どうかな？

チエコ うーん。

アキオ ん、どこか気になる？

チエコ あ、いえ、どうもイネの人間性がよくわからないんですよ。客観的にすぎると言うか。

アキオ 史実に基づこうとすると、どうしても、ね。

チエコ もう少し、イネに自分から話させてみたらどうですか？

アキオ うーん。なるべく余計なことは言わせたくないんだよな。僕が想像したイネの像を、そのまま読者に信じられたら困る。

チエコ でもそんなこと言ったら会話なんて何も書けないじゃないですか。

アキオ だから、その人物の思考、性格をなるべく把握して、この言葉なら間違っていないだろうと思えることだけを厳選して書く。そうすると、こうなる。

チエコ まあ、そこはアキオさんのカラーってことで、受け入れられるとは思うんですけど……。

間。

チエコ その、ちよっと個人的な話になっちゃうんだけど。

アキオ うん。

チエコ これ書き終えたら、一緒に住んでくれるんだよね。

アキオ もちろん。

チエコ 私、本当は嫌なんだよ？この子が生まれたとき、一人なんて。

アキオ わかってるって。

チエコ 今日会社と話つけてきた。アキオさん以外の担当は、フクエさんの今回の作品で外してもらう。

アキオ そっか。

チエコ この子が生まれた後は、しばらくはアキオさんの編集だけでやって行くことになる。

アキオ うん。

チエコ （話を聞いていないことに気付いて、軽くため息をつき）そろそろ行くね。

アキオ （顔を上げて）ああ、うん。フクエさんにもよろしく。

チエコ はいはい。

八、イネの学問

イネの部屋。朝。蘭学書（紙束）を開きながらうとうとしている。敬作がやってくる。

敬作 おはよう。

イネ あ、おはようございます！

敬作 また徹夜か。気持ちだけ急いても、続けられなければ形にならない。

きちんと睡眠を取ることも重要なことだよ。

イネ すみません。

敬作 ・・・やはり考えてみたんだが、産科を目指すのならば、産科の先生につくべきだと思う。

イネ はあ。

敬作 私の知人に石井宗謙という産科医がいる。彼もシーボルト先生の弟子だ。

イネ 父さんのお弟子さん。

敬作 どうかな？

イネ お会いしたいです。

敬作 よし。彼に手紙を出しておこう。（立ち上がり）ああ、あとこれからしばらく家を空けるから、わからないことがあったら書き溜めておくように。

イネ わかりました。行ってらっしゃいませ。

九、話が混ざり始める

アキオは席を立つ。入れ替わりでフクエが入って来て、缺で紙束を切り始める。緒方洪庵の元に敬作がやってくる。

敬作 先生もご存知かと思われませんが、黒船の来航以来、世間は大変せわしなくなっています。我が宇和島藩では、この度軍事を統括する人材を探しております。先生の門下で蘭学に長けた適任者がいないものかと、こうしてお伺いに参った次第です。

緒方 そういうことでしたら、一人いるのですが。

敬作 ほう。

緒方 いや、その者は家業をついで田舎で医者をやっています。果たして受けてくれるかどうか。

敬作 どなたですか。

緒方 村田蔵六と申します。

敬作 おお、村田先生ですか！それはいい。

フクエ さてさて。こっからだね。

フクエは去る。

十、石井宗謙の元へ

イネが石井宗謙の元に産科を学びに来る。玄関の前に立ち、

イネ すみません。すみません。どなたかいらっしゃいませんか？

奥から鬱屈した表情の石井宗謙が出て来る。

宗謙 はい。どなたでしょうか？

イネ 二宮先生のご紹介で参りました、イネと申します。石井宗謙先生はご在宅でしょうか？

宗謙の目が輝き、初めてイネをまともに見る。

宗謙 おイネさん・・・？本当におイネさんかい？

イネ え、あ、はい。

宗謙 ……お美しくなられた。

イネ あ、ありがとうございます。

宗謙 申し遅れました、宗謙です。お待ちしてましたよ。さ、こちらへ。

女性を扱うのに慣れた手つきで奥へ促す。

イネ (戸惑いながら) はあ。

十一、宇和島にて

敬作 やあやあ、これは村田先生。よくお越し下さいました。いかがですか。

宇和島は。いいところでしょう。

蔵六 ええ。

敬作は蘭学書（紙束）を集めて蔵六に手渡して行く。だんだんと蔵六の腕に積み上げられて行く。

敬作　ひとまず、こちらの歩兵、騎兵に関するもの。あとは、そうこの新式銃の解説書、おおそれなら念のため旧式の解説書もお渡ししなければ。あとは蒸気船の設計書。こちらはすごいですよ。あの黒船の構造が記されているものです。あとは、そうですね・・・

蔵六の姿を見て思いとどまる。

敬作　ああ、これは失礼しました。まずは今お渡ししたものをお読み頂き、重要な部分については和訳していただきたい。

蔵六　わかりました。

蔵六は蘭学書を読み始める。

十二、イネの妊娠

イネが写本の束（紙束）を持って宗謙の元に来る。

イネ　石井先生、写し終わりました。（紙束を渡す）

宗謙　（予想より随分早かったことに驚きながらも受け取り、）ふむ。

イネ　それでは失礼します。

宗謙　・・・イネ。

イネ　はい、なんでしょう？

振り返ったイネを宗謙が抱きしめる。

イネ　え？

宗謙　あなたが好きだ。一目見たときからすっかり惚れ込んでしまった。

イネ　・・・止めてください、石井先生。

宗謙　先生なんて呼ばないでくれ。

イネ　私は学問を志したとき、女を捨てました。あなたは、先生以外の何者

でもありません。離してください。

宗謙 ・ ・ ・ 知らない。そんなことは知らない。

イネ え？

宗謙 私の目に映るあなたは、美しい瞳で私を見つめるただの小娘だ。あなたが何を思っているように、そんなことはどうでもいい。（荒々しく手を動かす）

イネ やめて、やめてください！

ゆっくりと溶暗。

十三、ハルカ誕生

長い沈黙の後、赤ん坊の泣き声が徐々に聞こえて来る。

やがて舞台がゆっくりと明るくなると、二組の母が娘を抱えて子守唄を歌っている。一組はイネとその娘、もう一組はチエコとその娘。アキオが二組の母娘の間に立っている。アキオはイネに惹かれそうになるが、思いとどまってチエコの元に向かう。出産1週間後。病院。

アキオ 遅くなってごめん。大丈夫？体調は。

チエコ うん。もうそろそろ復帰出来るよ。ごめんね、原稿。

アキオ いいよ、そんなこと。

チエコ 編集長変わってないでしょ。

アキオ 相変わらず態度のでかいおっさんだったな。

二人ともハルカを見る。

アキオ 良く寝てる。

チエコ そうだね。ね、そろそろ名前。仕事も落ち着いたでしょ？

アキオ ああ、うん。考えて来たよ。

チエコ なになに？

アキオ ハルカ。

客席のドアが開き、ハルカが舞台上上がる。チエコが抱いている赤ん坊を

受け取る。

チエコ ……ハルカ。

アキオ 自分が思い描いた世界をどこまでも遙か遠くまで突き進んでほしい。そう思ってる。

チエコ そっか。(ハルカに向かって) だってよ、ハルカ。いい名前つけてもらって良かったね。

ハルカは微笑んで去る。アキオは鋏を取り出し、紙束を切り裂いて行く。

チエコ 再来週分、なんとかなりそう？

アキオ ……どうかな。ちよつと詰まってる。

チエコ そう？原稿持って来てくれれば、すぐ読むけど。

アキオ いや、今はゆっくり休みなよ。

チエコ ありがとう。(去りつつ) 戻ってるね。

アキオ うん。

十四、長崎に帰ったイネ

イネとその娘に視点が移る。妊娠、出産し、失意のうちに長崎の実家に帰っているイネの元に敬作がやって来る。

敬作 イネ！良かった。宗謙の元にはいないと聞いて、方々探しまわったよ。

どうした、故郷が恋しくなったかな。

イネ ……いえ。

敬作 元気がないじゃないか。お、その子は…？

イネ ……私の子です。

敬作はイネが医者道の道を諦め結婚したと思ひ、言葉に詰まる。

敬作 ……そうか。おめでとう！いやあ、普通に幸せになれるならば、そ

れが一番良い！そうかそうか。父親はどんな人なんだい？

イネ 石井先生です。

敬作 え？

イネ 石井宗謙先生に手込めにされました。

敬作 ……なんだった？

イネ 必死になって逆らいました。でも。

敬作 宗謙……！先生のご息女になんてことを……！

イネ この子は、誰の手も借りず私一人で産みました。それだけの産科の知識、経験は得たつもりです。二宮先生、それでも私は、女という形からは逃れられないそうです。

イネは泣き崩れる。敬作は側にやさしく寄り添う。

敬作 いいんだ。いいんだよ。今はゆっくり休みなさい。

滝がやってくる。

滝 敬作さん。

敬作 お滝さん、イネ……本当に済まない！私が、私が、宗謙の元に行かせなければ……

滝 ……女というのは、本当に不便なものです。結局、私たちは男からは逃れられないでしょう。

敬作 ……。

滝 敬作さん。少しイネと二人きりにしてもらえませんか。

敬作 ……失礼します。

敬作は去る。間。イネのすすり泣く声が聞こえる。

滝 イネ。

イネ ……。

滝 お前は本当に馬鹿だねえ。だから言ったじゃないか。

イネ ……。

滝 母さんはね、あんたくらいの時にオランダ行きの遊女になった。

イネ ……。

滝 その頃うちは本当に貧乏でね。姉さんがもう奉公に出ていて、そのおかげでご飯が食べられているのも知っていたから、本当に嫌で嫌で、死ん

でしまおうかとも思ったけど、私も奉公に出た。

イネ・・・なんとなく、わかったた。

滝 あんたには、そんな特別な思いはさせたくなかったんだ。普通にお嫁に行つて、普通の家庭を作つて、家族に囲まれて一生を終える。そんな普通の幸せな女になつてもらいたかつたんだ。

イネ・・・ごめんなさい。

滝 でも、私がそんな幸せを手に入れていたら、旦那様と知り合うことはなかった。イネも産まれてこなかった。・・・この子も産まれて来ることはなかった。

イネ うん。

滝 これで良かった。そう思うしかないんだ。

十五、家族が揃つて暮らす

アキオは鋏を置き、一息つく。ドアのノック音。

アキオ はい。

アキオは立ち上がりドアを開けに行く。チエコと二人で戻つて来る。

チエコ ごめんね、邪魔しちゃつて。

アキオ や、大丈夫、今一息ついたとこ。ハルカは？

チエコ 今お母さんが見てくれる。すごいよー、もうつかまり歩きできるよになつたんだから。

アキオ・・・ちよつと早いけど、やっぱり一緒に暮らさないか。

チエコ ええ、どうしたの急に。

アキオ いや、なんとなく。これからハルカもチエコも、父親がいないんじゃないかと思つて。

チエコ・・・ありがとう。

アキオ よし。そうと決まれば。

チエコ なになにに、どうしたの？

アキオ 大家さんにちよつと話して来る！

チエコ ええ？はい。そっか。(微笑みつつ去る)

フクエが缺で紙束を切りつつ入って来る。

フクエ さーてさてさて、この辺からいい加減怒られちゃうかなー。

蔵六がいつの間にかフクエの方を見ている。

フクエ うわっとびっくりした。まあそう睨むなよ。悪いようにはしないからさ。

フクエは狂言回し然とした語り口で浪々と語り始める。

フクエ さてさてここからはみんな大好き大人の時間。村田蔵六の恋の物語について語って行くことにしよう。おどろいてはいけない。彼だつて立派な男だ。

敬作が蔵六の元にやってくる。

敬作 村田先生。今日は折り入ってお願いがありました。

蔵六 なんででしょう。

敬作 一人、先生に面倒を見ていただけないかと。

蔵六 はあ。

敬作 このところ兵学にお忙しいことは無論承知の上で、是非お頼みしたいのです。

蔵六 どのような方ですか。

敬作 我らが日本医学者の父、シーボルト先生が残した娘です。

蔵六 娘。

敬作 彼女は、既に産科医としての道を歩いています。どうか先生のお力で助けてやってください。

蔵六 いいでしょう。

敬作 おお！村田先生ならそうおっしゃってくださいさと思った。ありがとうございます！

蔵六 ……女。

アキオが慎重に缺で紙束を切っている。

イネの元に敬作がやってくる。イネの子供が走り回っている。

敬作 おお、おお。もうあんなに走り回って。

やわらかい沈黙。

敬作 村田蔵六先生という方がいる。蘭学の偉い先生だ。・・・もう一度、産科の道に戻ってこないか。

イネ ・・・。

敬作 これからだ。これからお前は、もつと多くの母親の命を救い、もつと多くの新しい命を救っていくだろう。それがお前の目指した形だったはず。

イネ ・・・あれからしばらく考えてみました。私は女です。それはもう変えようのない事実です。いくらその形を捨てようともがいても無駄だと思ひ知りました。

敬作 ・・・そうか。(落胆して去ろうとする)

イネ でも、どうしても消えないんです。

敬作 え？

イネ 私が産科医として、これから母になろうとする女性達の手助けをするために走り回っている姿。その絵が、頭から消えてくれないんです。

間。

イネ やらせてください。

敬作 ・・・良く言った。村田先生にはもう話をつけてある。

イネ 何もかも、本当にありがとうございます。

敬作 いいんだ。イネの中にあるその絵を私も見てみたい。

アキオは缺を置く。チエコが、お茶の湯のみと、フクエの小説が掲載された新聞(紙束)を持って入って来る。

チエコ お疲れ様。順調？
アキオ ああ、うん。
チエコ どれどれ。あ、これ。今週のフクエさん。（新聞を渡す）
アキオ サザエさんか。（読み始める）

十八、イネと蔵六・フクエ

フクエの描くイネは客観化された「女」としてのイネ。エキゾチックな色気が漂っている。

イネ 失礼します。（柔らかい所作で）失元イネと申します。

蔵六 どうも。村田です。

イネ あの・・・（蘭学書を差し出す）

蔵六 これは？

イネ 理解出来ないところをまとめて来ました。

蔵六 それはけっこうなことです。しかし、まあ、今日は遅い。明日また出直していただくのがいいでしょう。

イネ それは困ります。

蔵六 それは私が困ります。

イネ ご迷惑でなければ

蔵六 迷惑です。

イネ そこをなんとか。

蔵六 今日のところは帰ってください。

イネ なぜですか？

蔵六 なぜって。あなたは女でしょう。私は男だ。

イネ はい。

間。蔵六は話が済んだと思っている。

イネ 私は構いませんよ？

蔵六 え、いやいやいや。

イネ 私は産科医としてここにきています。女として扱っていただかなくて
もいっこうに構いません。

蔵六 構います。ああ、らちがあかない。今日のところはとりあえず二、三
訳しますから、終わったからお引き取りください。

イネ ありがとうございます！

フクエ とこんな具合で、毎夜毎夜やって来てはあれこれと質問を浴びせか
け、時にはそのまま泊って行くこともある。さすがの堅物、村田蔵
六もこれには参った。

アキオが新聞から目を離す。

チエコ どう？

アキオ いや、これは。

チエコ ずいぶん色っぽいお伊ネさんだよね。

アキオ うん、まあ。(鉄を手取る)

チエコ あ、ごめん、邪魔しちゃったね。

アキオ いや、ありがとう。

十九、産科修行再会、イネと蔵六・アキオ

イネが妊婦の家に往診に来ている。妻と夫の前に座り、

イネ おめでとうございます。ご懐妊ですね。

妻は柔らかい微笑みを浮かべる。

夫 本当ですか！でかしたぞ！

妻 本当に、本当にこのおなかの中に赤ん坊がいるんですね。

イネ これからはなるべくお腹に刺激を与えないよう過ごしてください。た
だし、臨月までは今まで通り身体を動かしててくださいね。

妻 はい！

イネ あと、(夫に向かって冷徹に)過度に怒りすぎるのは良くないので、
旦那さんは良く心得てください。

夫 は、はい。

イネ (立ち上がりながら)定期的に伺いますが、もし何かあった場合は、

二宮先生のうちへご連絡ください。

妻 本来にありますがとうございます！先生！

イネ 先生？

妻 え？

イネ (にやにやしつつ) あ、なんでもありません。それではお大事に。

夫婦は喜びながら去る。イネは蘭学書を開きながら蔵六の元に向かう。

イネ 遅くなりました！

蔵六 はい。

イネ 今日はこちらをお願いします。

蔵六 ええ。

蔵六が蘭学書に目を通してしていると、イネはうつらうつらし始める。蔵六は目を上げて、

蔵六 イネさん。

イネ はい！

蔵六 今日は帰ってください。

イネ え、あ、すみません！ですが。

蔵六 あなたはここに蘭学を学びにきている。あなたの今の状態で理解出来る程蘭学は簡単ではない。ですから、今日は帰ってください。

イネ ……はい。申し訳ありません。

イネは敬作の家に戻る。家に着いたとたん眠気が襲って来る。

敬作 おお、イネ、お帰り。向かいの商家の二番目の娘さんがどうやらご懐妊らしい。是非ともイネに見てもらいたいということだ。

イネ ああ、ありがとうございます。

敬作 ようやく一人前というところかな。

イネ いえ、そんなこと。まだまだ、これからです。(だんだんとへたり込んでしまう)

フクエが鉄を操りながら舞台を横切って行く。
蔵六の部屋にイネが来ている。

イネ 本日も、ありがとうございます。（しなやかに頭を下げる）

蔵六 ええ。

イネが立ち上がった拍子によるけ、蔵六の腕に抱かれる。

フクエ おっと。

きまづい沈黙。

イネ 村田先生。

蔵六 これは、まあ、不可抗力というやつです。

イネ 構いませんよ。

実際は一瞬だが、二人にとっては永遠にも思えるような間。

蔵六 ……何がです。

イネ （蔵六から離れて、妖艶に笑いながら）なんでもありません。また今度。おやすみなさい。

イネは去り、蔵六が一人取り残される。

二十一、歴史小説の在り方

アキオが息をまいて話に割り込んで来る。

アキオ 訂正してください。

フクエ おいおい。（蔵六を舞台袖へ移動させる）

アキオ おかしいでしょう。こんなの。僕が調べた資料の中には、蔵六とイ

ネがこんな関係であったことを示すものなんてひとつもなかった！
あるんですか、そんなものが。

フクエ まあいいじゃない。

アキオ よくないですよ！フクエさん、僕もあなたも、「歴史」小説家という名前を世間から頂いている。物語と同時に、事実を提供する義務がある。こんなの、まったくのフィクションじゃないですか。

フクエ そうかなあ。

アキオ どこが違うんです。

フクエ 蔵六とイネが、恋仲では「なかった」ことを示す資料はあったのかな。

アキオ ……そんなのありませんよ。

フクエ じゃあいいじゃない。

アキオ でも、イネが、蔵六に限らず男を好きになったとは、僕には思えません。彼女は、彼女は宗謙に手込めにされ、一時期学問を放棄しています。その傷を抱えながら、同じ師匠という立場の蔵六と、そんな仲になるとはどうてい考えられません。

フクエ なるほど。……で、それは君が描いたフィクションではないのかな？

アキオ え？

フクエ 事実を描く。それはとても難しい仕事だよ。君の言う通り、私たちは歴史「小説」家だ。事実の上に物語を描いていく仕事だよ。

△後略▽

※台本の全文は1部500円にて販売しております。

ご希望の方はクロ・クロ制作部までご連絡ください。

※上演をご検討される際は、必ずクロ・クロ制作部までご連絡ください。

クロ・クロ制作部 kurokuro.office@gmail.com